

# 江差追分を小中学校の授業に

江差町郷土資料館（江差町）

独特の音調を持ち、多くの唄い手によって磨かれ唄い継がれ、「民謡の王様」とも称される江差追分。江戸時代から信州の軽井沢付近で唄われていた馬子唄が越後に伝わり、そこから北前船によって江差に運ばれてきたといわれている。

この江差追分の道場を開いている浅沼春義さん（第15回江差追分全国大会優勝）は、道場に通う教え子だけでなく、地元の小中学校や高校、看護学校にまでこの伝統文化を教えている。

「唄はもちろんですが、江差追分を通して江差の歴史や文化を教えているのです」

浅沼さんはそう強調すると、江差追分の代表的な一節を披露してくれた。

「♪かもめの鳴く音にふと目を覚まし あれが蝦夷地の山かいな～」

その唄を聞いていると、蝦夷地での成功を夢見て北前船に乗り込んだ若者たちの姿が目に見えてくる。長い航海の末、かもめの鳴く声で目覚める。蝦夷の山々が見える。期待と不安に胸躍らせながら、故郷に残してきた両親や恋人のことを思い出す若

者たち——

江差追分の歌詞と調べには、先祖のそうした期待や郷愁が込められている。



江差北中学校で教える浅沼さん（2010年1月29日）

## ■ 町民のすべてに江差追分

江差町は江差追分全国大会の開催や、全国の愛好者のためのセミナー、師匠会（師匠のための講習会）などを毎年行っており、民謡の「総本山」としてその地位を築いていたが、地元出身者が全国大会で優勝できないなど後継者の育成に遅れを取っていた。

こうしたことから、市民グループや町の教育委員会などが協働で、10年ほど前から地元の青少年に対して江差追分に興味を持

ってもらおうと働きかけている。

その一端を担っている江差町郷土資料館の宮原浩さん（町教育委員会学芸員）は、「市内には小学校 3 校と中学校 2 校がありますが、毎年各学校にお願いして授業に取り入れてもらうようにしているのです。どこも年数回、江差追分の授業が行われています」と説明する。

2010 年 1 月 29 日に江差北中学校で行われた江差追分の授業では、生徒 15 人が参加、浅沼さんの指導で練習した。生徒たちは、最初は恥ずかしくて声を出せないが、合間に入れるかけ声「ソイがけ」などを教わると、浅沼さんの伴奏する尺八に合わせ徐々に声を出せるようになっていく。



江差追分を伝える拠点「江差追分会館」

江差追分は西洋の音階とは違い、独自の音階と節回しがある。「せつど」「本すくり」「半すくり」。声を裏返して音程を変えたりする高度な節回しなどもある。一人前になるには数十年かかると言われているが、地元の子供たちはどこかで江差追分に触れているため、カンが良いという。「小学生は 3

年生から始め毎年講習を行うので、少しずつですが、確実に上達してきますよ」と浅沼さんは話している。

授業を受けた生徒は、「最初はちょっと恥ずかしかったけど、歌ってみると懐かしい感じがしました」、「近所に住むお年寄りが、もっと難しい江差追分を聞かせてくれたことがあって、すごいなあと思っていました」などとその印象を語っている。

また、地元の保育園や看護学校、高校にも江差追分の授業が導入されている。江差高校では正式な授業の単位になっており、希望者は年間 80 時間の授業を受けて単位を取得する。2009 年には 14 人が、2010 年には 9 人が受講している。地元の看護学校でも必修科目となっており、学生全員が江差追分の講義を受ける。

浅沼さんは「江差追分を唄うときは 25 秒間、息継ぎをしてはいけません。こうやって、喉で唄うのではなく、腹で唄うのです」と言いながら実演する。江差の伝統文化が、言葉ではなく、なにか独自の雰囲気として筆者に伝わってきた。

#### ■ 伝統継承、ソフトとハードの両輪

江差追分の継承が人材育成といったソフト面でのまちづくり事業であるとすれば、歴史的な資料や建物の保全といったハード面のまちづくり事業も行われている。

江差町役場のすぐ隣に建てられている「江差追分会館」が、それである。この会

館では、江差追分の歴史が分かる民俗資料などを展示するだけでなく、江差追分をはじめとする郷土芸能を毎日実演している。さらに一般の人でも指導が受けられる追分道場もあり、江差追分を伝承する拠点ともなっている。

そのほか、江差に残る歴史的な建造物を後世に伝えようと、歴史や文化を生かすつ景観に配慮したまちづくりが行われている。1989年から、昔の町並みを再現する「歴史を生かすまちづくり事業」をスタートさせ、2004年に完成。現在は「いにしえ街道」として観光名所となっている。この街道で雑貨屋を営む紺谷捷子さんは、「店のあちこちに古道具を展示していますよ。いにしえの時代に、私たち町民が案内しますから、気軽に声をかけて下さいね」と語っている。

こうした江差追分を中心とする伝統文化の継承は、町の方針として打ち出されており、濱谷一治町長みずからが定例議会（2010年3月）でも明言している。

「江差追分の振興については、将来の江差追分を見据えた後継者育成の強化などに取り組めます。また、2年後に迫った第50回江差追分全国大会を節目の大会として成功させるため、町全体で歓迎の取り組みを進めます」と、町の広報誌（「広報えさし」2010年4月号）に記載している。



歴史的な建造物を再現した「いにしえ街道」

「～♪なにを夢見てなくかよ千鳥ネ ここは江差の仮の宿」

浅沼さんの力強い唄が続いている。

先祖の想いが、そのまま歌詞としても調べとしても残っているような感じがした。まさに、江差の文化であり歴史であり、町民たちのルーツそのものである。これを継承していくことこそが、まちづくりの基礎となるだろう。

■ 連絡先

〒043-0034 檜山郡江差町字中歌町 112

江差町郷土資料館 学芸員 宮原浩

TEL/FAX : 0139-54-2188

E-mail : museum@hokkaido-esashi.jp

URL : <http://www.hokkaido-esashi.jp/museum/top.htm>